小・中・高を見通した伝統的な言語文化教材

代表　石井正己（人文社会科学系　日本語学・日本文学分野）

○ 開発教材の形式：　冊子
○ 対 象 学 校 種：　小・中・高
○ 実施可能教科等：　国語・道徳の時間等
○ 関連する道徳の内容項目：
　　誠実・明朗、思いやり・親切、生命尊重、
　　自然愛、勤労、国際理解・親善など

教材内容の紹介

『小・中・高を見通した伝統的な言語文化教材』には、道徳教育用に作成された豊かな言語文化教材と、それらの解説が含まれています。

小学校用教材では、明治期以降の民話が５作品集録されています。「ミミズの話」（和歌山の民話）、「蝉の話」（和歌山の民話）、「蛙の親不孝」（和歌山の民話）、「青蛙」（韓国の民話）、「ピンドン」（フィリピンの民話）が掲載されています。いずれも、民話に残された豊かな方言と人の思いをそのままに紹介されている貴重な教材となっています。中学校用教材では、近世中期の２作品が集録されています。安永二年に刊行された『前訓』という書物のなかで子どもに向けて生き方を説いた「口教」と、江戸中期の草双紙『風流　そそそ　大福長者物語』が紹介され、近世の人々が大切にした心がけとはいかなるものであったのかを伝えてくれます。高等学校用教材としては、御伽草子『浦島太郎』を題材として道徳を考える試みが紹介されています。なお、それぞれの出典、学年・時間配当、教材の意図は「解説」にて詳述されています。

開発のポイント

平成 23 年度から実施された小学校国語科の学習指導要領では、「伝統的な言語文化に関する事項が設けられ、いわゆる神話・昔話をはじめ、日本古典が重視されるようになった。国際化・情報化が進む時代にあって、むしろ自国の伝統的な文化に対する危機意識が高まった結果に違いない。こうした大きな教育改革の時期にあって、従来の教材を批判的に継承し、新たな教材を開発していくことの意義は大きい。そこで、プロジェクトの構成メンバーが基礎的な研究を踏まえて、次のような分担で教材開発を進めた。

① 小学校の教材―明治期以後の民話集―石井正己
② 中学校の教材―江戸中期の草双紙と心学―黒岩陽子
③ 高等学校の教材―江戸・室町の御伽草子―湯浅佳子

この教材構成の特色は、子どもたちの成長する過程を見据えつつ、それを古典の歴史を遡ることに対応させようとしたところにある。思えば、近代社会では古典に見られた価値観を陳腐なものとして切り捨ててしまったが、結局、新たな規範を構築することは出来なかった。そこでこのプロジェクトでは、古典の中から古くて新しい道徳観を抽出し、現代的な課題と向き合うための教養を構築したいと考えた。

小・中・高を見通した伝統的な言語文化教材

石井正己・黒石陽子・湯浅佳子（日本語学・日本文学）

平成 23 年度から実施された小学校の学習指導要領では、「伝統的な言語文化に関する事項」が設けられ、いわゆる神話・昔話をはじめ、日本古典が重視されるようになった。国際化・情報化が進む時代にあって、むしろ自国の伝統的な文化に対する危機意識が高まった結果にちがいない。こうした大きな教育改革の時期にあって、従来の教材を批判的に継承し、新たな教材を開発してゆくことの意義は大きい。そこで、フロジェクトの構成メンバーが基礎的な研究を踏まえて、次のような分担で教材開発を進めてみた。

① 小学校の教材―――明治期以後の昔話集――――石井正己
② 中学校の教材―――江戸中期の草双紙と心学――黒石陽子
③ 高等学校の教材――江戸・室町期の御伽草子――湯浅佳子

この教材構成の特色は、子供たちの成長する過程を見据えつつ、それを古典の歴史を遡ることと対応させようとしたところにある。思えば、近代社会では古典に見られた価値観を陳腐なものとして切り捨ててしまったが、結局、新たな規範を構築することはできなかった。そこでこのプロジェクトでは、古典の中から古くて新しい道徳観を抽出し、現代的な課題と向き合うための教養を構築してみたいと考えた。具体的には、〈小学校の教材〉〈中学校の教材〉〈高等学校の教材〉に関して、次のような教材構成を考えている。

〈小学校の教材〉

かつて家庭における道徳教育は、「躾」という言葉に集約されるかたちで存在した。たとえば、宮本常一の『家郷の訓』には、祖父母や父母に与えられた「躾」が感慨深く記述されている。そうした家庭の機能はすっかり失われてしまったが、日本各地で伝えられてきた昔話にはそれがよく残されている。折口信夫は民俗を「生活の古典」と呼んだが、昔話を伝統的な言語文化を担った古典として位置づけることに大方の依存はあるまい。

昨年度に発行した『山形の民話に学ぶ』『成田キヌヨの語る昔話』には、山形県と青森県の昔話をまとめてある。そこには、「「人は、欲張れば、大水食らう」って、そのことだんだヨ」「神様見でいるがら、家の人たちア仲良ぐ、人助けしたりしていれば、良いことあるんだド」といった言葉が見つかる。昔話を通して、「欲張り」を戒め、「仲良し」「人助け」を勧めていることが確認される。こうした視点でのさらなる資料の蓄積が必要ではないかと考えて、本年度は『山陰の民話に学ぶ』を発行し、鳥取・島根両県の昔話を取り上げる予定である。

そこで、小学校の教材では、昔話の価値を認めつつ、次のように構成してみる。

① 低学年―「ミミズの話」「蝉の話」（『和歌山の民話』）
② 中学年―「蛙の親不孝」（『和歌山の民話』）、「青蛙」（『キムさんの韓国民話』）
③ 高学年―「ピンドン」（『オリーブおかあさんのフィリピン民話』）

①は食べることと働くことに対する態度、②は親不孝と親孝行をめぐる葛藤、③はいじめからの自立を扱った話である。ここでは「伝統的」ということを日本に限定せず、国際的な視野に立って考えることが大切ではないかと考え、日本に来た外国人花嫁の語った韓国とフィリピンの昔話を採用している。もちろん、発行した資料の中にも教材にできる昔話は多いが、報告会で矢部敦子さんに語っていただく機会を設けたので、それと対応するように『和歌山の民話』から選んである。なぜ語りを重視するかと

言えば、文字で書かれた古典を読む前に、まず人の話を聞いて考える力を身につける必要があると考えているからに他ならない。（石井正己）

〈中学校の教材〉

近世中期は都市町人を中心とする庶民階層が、人としての生き方を模索し、その思索の積み重ねが形となって、庶民階層に次第に浸透していく時代であった。心学がその代表的なものである。一方、この時代は文学や文化の担い手としても庶民階層が多くを担う時代となり、子供を読者の対象とする草双紙もこの時代に盛んに出版された。

これらの著作や作品の中には、近世中期における人々の自然観、人間観、そして道徳観を多く読み取ることができる。本教材開発ではこの時期の作品を、心学と草双紙の双方から開発し、中学生を対象とした道徳教材として提示したいと考える。

草双紙の教材としては明和 5 年（1768）に江戸で刊行された『風流／そそそ　大福長者物語』を開発する。絵と文章によって、そこには動物をいたわる心、善悪の対立、真摯な恋心、貧富、信仰心といった、当時の人々が日常生活の中で大切にしていた価値観が披瀝される。素朴ではあるが、現代においても変わることの無い人間の考え方をそこには見出すことができる。250 年ほど前の人々の価値観を知ることにより、現代の我々が必要なものは何かを考える資料として活用することができる。

また心学の資料を使ったものとしては安永 2 年（1773）に京都で刊行された手島堵庵の『前訓』を取り上げる。当時の男子、7 歳から 15 歳、女子は 7 歳から 12 歳までを対象として行われた講釈の記録である。ここには当時の子供たちに分かりやすく語られた、人としての生き方の具体的な項目が並べられている。これも 250 年近く前の子供たちが聞いていた事柄が、現代の中学生にとってどのようなものとして受け止められるのか、時代を隔てて生きる同年代の人間として、客観的・批判的な視点も持ち合わせながら受け止めるものとして提示したい。（黒石陽子）

〈高等学校の教材〉

『高等学校学習指導要領解説　特別活動編』（平成 21 年 12 月、文部科学省）には、高校生の特別活動の目標の一つとして「人間としての在り方生き方」に関する教育があげられ、道徳的心情、道徳的実践意欲・態度などからなる道徳性を養うことを目的とする道徳教育と関連させて行う必要が示されている。人間としてあるべき生き方を考えるための伝統的な言語文化教材として、ここでは日本の中世・近世期に読まれた物語作品をあげる。

『一寸法師』『浦島太郎』『酒呑童子』『鉢かづき』など、現在でも子どもの絵本や昔話として広く読み親しまれているお伽草子は、室町時代から近世時代初期に成立した短編物語である。江戸時代中期に絵入り板本として出版され、広く流布した。

それらの物語では、竜宮城や鬼が島などの異界が場面となり、神仏の霊験や鬼や魔物との戦い、動物との交流や結婚などの不思議な話が描かれる。そうした文芸としての興味を持たせつつ、物語の主題としてある道徳的な内容について触れていきたい。例えば、人や動物に対する思いやり、公平さ、家族愛、男女の愛情、自他の生命の尊重、自律的な責任ある行動の重視、差別や偏見のない公平さ・正義の実現、寛容さと謙虚さ、礼儀正しさ、人力を越えたものや自然への畏敬の念などの道徳的事項をそれらの物語から読み取ることができる。

お伽草子は、長い年月の間に様々に内容や主題を変えながら読み継がれてきた。現在に伝わる話と原話とを比較してみると、思いもよらない原話の面白さを見つけることができる。そうした物語分析をとおして、日本に古くから伝わる美徳や、ものの考え方・思想についても触れ、日本人としての自覚を促すことができる。（湯浅佳子）